ERLにおけるイオン捕獲の検討(1)

高エネルギー加速器研究機構(KEK) 物質構造科学研究所 坂中章悟

2006/09/15 第6回ERLビームダイナミックスWGミーティング

検討の目的

ERLでは、イオン捕獲による問題は起こるか? 起こるとすれば、どのような対策が考えられるか? ・特に、真空圧力を下げること(超高真空)は重要か? →ダクトのアパーチャー、排気系の設計方針と密接に関連

参考文献: (一般的なイオン捕獲に関する文献)

- [1] G. Brianti, Proc. CERN Accelerator School, CERN 84-15 (1984) pp. 369-383.
- [2] Y. Baconnier, Proc. CERN Accelerator School, CERN 85-19 (1985), pp. 267-300.
- [3] Y. Baconnier, A. Poncet, P.F. Tavares, Proc. of CAS, CERN 94-01 (1994) pp. 525-564.
- [4] A. Poncet, Proc. CERN Accelerator School, CERN 95-06 (1995) pp. 859-878.

(ERLにおけるイオン捕獲の検討)

[5] G. H. Hoffstaetter, M. Liepe, Nucl. Instrum. & Methods A557 (2006) 205.

蓄積リングでのイオン捕獲による不安定性の例(1)

PFリング初期のころ(1986年、 $\epsilon_x \sim 400 \text{ nm} \cdot \text{rad}$)の例



垂直ビームサイズのパルス変動







初期のpartial fiiling の例



変動の周期は真空条件に依存. (PF Activity Report 1982/83.)

対策:1)空バケット(partial filling) 2) Octupole magnet 3) 良い真空(~10⁻¹⁰ Torr台)

軌道上のイオンを制動放射によって観測した例

ビームの垂直方向パルス変動と同期して制動放射の計数をした。

H. Kobayakawa et al., Nucl. Instrum & Methods A248 (1986) 565.



蓄積リングでのイオン捕獲による不安定性の例(2)



Partial filling でのボタン電極スペクトル。 200 mA, octupole OFF, FB off.

ERLではイオン捕獲は問題か?

- イオンは捕獲されるか?(Critical mass の問題)
- 捕獲された場合、考えられるビームへの影響
 - チューンシフト(ベータトロン振動の位相誤差)

•ビーム不安定性?

- Fast ion instability ?
- Multibunch beam breakup に似たメカニズムの可能性?
- 問題がありそうな場合、有効な対策は?
 - Clearing electrode
 - Bunch gap(RF電圧変調の問題あり)、など

残留ガスのイオン化

あるビームラインの区間(長さℓ)を考えた時、区間内にある電子ビームの粒子数と 同数のイオンが作られる時間をイオン化時間(ionization time)と呼ぶ:

$$\tau_i = \frac{1}{\sigma_i d_{\rm m} \beta c}$$

σ_i: イオン化断面積 (m²)
 d_m: 分子の密度 (m⁻³)
 βc: ビームの速度 (m/s)



イオン化のevent rate:
$$R = rac{I_0 d_m \sigma_i \ell}{e}$$
 [s⁻¹]
長さ ℓ 内のビーム粒子数: $N = rac{I_0 \ell}{e eta c}$

$$R \times \tau_i = N$$
 7

残留ガスのイオン化

イオン化断面積: (c.f.) F.F. Rieke and W. Prepejchal, Phys. Rev. A6 (1972) 1507.



Beam energy E (MeV)

主要な分子に対する定数 M² および C

分子	H ₂	CH ₄	H ₂ O	СО	Ar	CO ₂	aceton e
M ²	0.5	4.2	3.2	3.7	3.7	5.8	11.9
C	8.1	41.9	32.3	35.1	38.1	55.9	118

主要なガス分子に対するイオン化断面積

イオン化時間

圧力と密度の関係: 理想気体の状態方程式より、

$$p = d_{\rm m} k_B T$$
 $d_{\rm m} [{\rm m}^{-3}] = 7.246 \times 10^{22} \times \frac{p[{\rm Pa}]}{T[K]}$



主要なガス分子に対するイオン化時間

9

バンチしていないビーム:静電ポテンシャル

Coasting beam でビーム断面は円形(半径:a)と仮定 チェンバー形状も円形(半径: r_0)と仮定。

ビームの造る静電場:

$$E_r = -\frac{\lambda_e}{2\pi\varepsilon_0} \cdot \begin{cases} \frac{r}{a^2} & (r \le a) \\ \frac{1}{r} & (r \ge a) \end{cases}$$





(例)

実証機: ビームサイズ a ~ 100 μ m, r₀ ~ 30 mm \rightarrow a/r₀ ~ 3×10⁻³, (E_r)_{max} ~ 60 kV/m 実用機: ビームサイズ a ~ 10 μ m, r₀ ~ 30 mm \rightarrow a/r₀ ~ 3×10⁻⁴, (E_r)_{max} ~ 600 kV/m (ビーム電流:100 mA)

٢

静電ポテンシャル:

$$V = -\int_{r_0}^r E_r dr = \frac{\lambda_e}{2\pi\varepsilon_0} \cdot \begin{cases} \ln\left(\frac{a}{r_0}\right) - \frac{1}{2} + \frac{r^2}{2a^2} \quad (r \le a) \\ \ln\left(\frac{r}{r_0}\right) \quad (r \ge a) \end{cases}$$

10

バンチしていないビーム:静電ポテンシャル(続)

(例) 実証機: ビームサイズ a ~ 100 μ m, r₀ ~ 30 mm → a/r₀ ~ 3×10⁻³ 実用機: ビームサイズ a ~ 10 μ m, r₀ ~ 30 mm → a/r₀ ~ 3×10⁻⁴







軸方向にポテンシャル井戸ができる可能性 (文献 [3] の Fig. 10 を引用) ¹¹

バンチしていないビーム:静電ポテンシャル(続2)

ビームによってイオン化されたイオンは、熱エネルギー程度(~1/40 eV)

ほとんどのイオンは、静電ポテンシャルによってトラップされ、ビームの電荷を 完全に中性化するまで蓄積されると考えられる。

中性化率(neutralization factor) -- ここでの定義

$$\eta(s) = rac{\lambda_i(s)}{\lambda_e}$$
 λ_i : イオンの線電荷密度 (C/m)
- λ_e : 電子ビームの線電荷密度 (C/m)

中性化率は1以下である。

Bunched beam におけるイオンの安定性

Original paper: Y. Baconnier and G. Brianti, CERN/SPS/80-2 (DI), 1980.

イオンはバンチが通過した時にイン パルス的な収束力を受け、その間で は自由に運動する。



バンチからの収束力(電場による)を線形近似 (thin focusing lens):

$$\begin{pmatrix} y \\ \dot{y} \\ \dot{y} \end{pmatrix}_{1} = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ -a_{y} & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} y \\ \dot{y} \\ \dot{y} \end{pmatrix}_{0}$$

バンチとバンチの間 (drift):

$\begin{pmatrix} y \end{pmatrix}$	(1)	τ_b	$\begin{pmatrix} y \end{pmatrix}$
$\left(\dot{y}\right)_2$	$\left(0\right)$	1)	\dot{y}_1

Kick factor (y方向)



r_p: 古典陽子半径、N_b: バンチ当たりの粒子数、 A: イオンの質量数(= m_{ion}/m_p)、Ze: イオンの電 荷、βc: ビームの速度、σ_x, σ_y: ビームサイズ (ガウス分布を仮定) 13

Bunched beam におけるイオンの安定性(続)

イオンの運動の安定条件: $\cos \mu = Tr(M)/2$ $|\cos \mu| < 1$ $M_y = \begin{pmatrix} 1 & \tau_b \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ -a_y & 1 \end{pmatrix}$ Critical mass より重いイオンが安定である: $A/Z > A_c^y$ $A_c^y = \frac{r_p c \cdot N_b \tau_b}{2\beta \sigma_y (\sigma_x + \sigma_y)}$

(例) ERLの典型的な運転モードにおいて x,y方向のビームサイズを等しいと仮定する: $\sigma_x = \sigma_y = \sigma$ $\beta = 1 \ge 0$ 、ビームの繰り返し周波数を $f_b \ge \tau_b = \frac{1}{f_b}$ $A_c = \frac{r_p c}{4e\beta} \frac{I_0}{\sigma^2 f_b^2} \approx 7.195 \times 10^8 \times \frac{I_0}{\sigma^2 f_b^2}$

Bunched beam におけるイオンの安定性(続)



15

(参考)ベータトロン関数に対するビームサイズ

 $\underline{\beta_x}\mathcal{E}_n$ $\sigma_x =$

(分散の効果は入っていない)

実証機(E~100 MeV)

実用機(E~5GeV)



Bunched beam におけるイオンの安定性(続2)



イオンは捕獲されてもおかしくない。JLab では何らかの現象が観測されて 17 いるのか?

(参考) Jefferson Lab. IR-FEL



イオンの空間電荷による蓄積の限界(bunched beam)

蓄積されたイオンの空間電荷を考慮: $M_0 = \begin{pmatrix} 1 & \tau_b \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \rightarrow M_{ion} = \begin{pmatrix} \cosh(g\tau_b) & \frac{\sinh(g\tau_b)}{g} \\ g\sinh(g\tau_b) & \cosh(g\tau_b) \end{pmatrix}$

イオンの造る電場を線形近似:

$$g^{2} = \frac{Ze}{Am_{p}} \frac{\partial E_{y}^{\text{ion}}}{\partial y} \qquad \frac{\partial E_{y}^{\text{ion}}}{\partial y} = \frac{d_{i}}{\varepsilon_{0}} \frac{Ze}{1 + \frac{\sigma_{y}^{i}}{\sigma_{x}^{i}}} = \frac{1}{2\pi\varepsilon_{0}} \frac{\lambda_{i}}{\sigma_{y}^{i}(\sigma_{x}^{i} + \sigma_{y}^{i})}$$

$$d_{i}: 4\pi \times 0 \otimes g(m^{-3}), \quad \sigma_{x}^{i}, \sigma_{y}^{i} : 4\pi \times 0 \times, y \text{ frightarmatical} = \frac{\pi_{p} c^{2}}{2}$$

$$(q_{1}) = \frac{\pi_{p} c^{2}}{2} \frac{\sigma_{p}^{i}(\sigma_{x}^{i} + \sigma_{y}^{i})}{2}$$

$$g\tau_{b} < 1 \text{ O} = \cos \mu \approx 1 - \frac{a_{y} \tau_{b}}{2} + \frac{(g\tau_{b})^{2}}{2}$$

$$frightarrow frightarrow f$$

捕獲イオン雲のビームへの影響(可能性)

- チューンシフト(ベータトロン振動の位相誤差)
 - Hoffstaetterの検討では、これだけでも大問題か?
 - 恐らく incoherent tune shift (個々の電子のチューンに影響を与える)
- ビーム不安定性?
 - Fast ion instability ?
 - Multibunch beam breakup に似たメカニズムの可能性?

イオンによるチューンシフト(ベータトロン位相エラー)

Tune shift:

イオンによる収束力:

$$\left(\Delta V_{x,y}\right)_{\text{ion}} = \frac{1}{4\pi} \int \beta_{x,y}(s) K_{x,y}(s) ds$$

$$K_{x}(s) = \frac{e}{\gamma m_{e}c^{2}\beta^{2}} \frac{\partial E_{x}^{\text{hold}}}{\partial x}$$

線形近似 (Gaussian):

$$\frac{\partial E_x^{\text{ion}}}{\partial x} = \frac{1}{2\pi\varepsilon_0} \frac{\lambda_i}{\sigma_x^i(\sigma_x^i + \sigma_y^i)}$$

イオンによる

L:ビームラインの長さ

イオンによる tune shift:

$$\begin{split} \left(\Delta V_x \right)_{\text{ion}} &= \frac{r_e}{2\pi\gamma\beta^2 e} \int_0^L \frac{\beta_x \lambda_i}{\sigma_x^i (\sigma_x^i + \sigma_y^i)} ds \\ \left(\Delta V_y \right)_{\text{ion}} &= \frac{r_e}{2\pi\gamma\beta^2 e} \int_0^L \frac{\beta_y \lambda_i}{\sigma_y^i (\sigma_x^i + \sigma_y^i)} ds \\ \left(\Delta V_{x,y} \right)_{\text{ion}} &= \frac{r_e I_0}{2\pi\gamma\beta^3 ce} \left\langle \frac{\beta_{x,y}(s)\eta(s)}{\sigma_x^i \sigma_y^i \left(1 + \frac{\sigma_{x,y}^i}{\sigma_{y,x}^i} \right)} \right\rangle L \end{split}$$

21

イオンによるチューンシフト(続2)

概算するために、次の仮定をおく。 1)イオンのサイズはビームサイズとだいたい等しい(必ずしも成り立たないが) 即ち、 $\sigma_x^i \approx \sigma_x$, $\sigma_y^i \approx \sigma_y$ 2)x,y方向のベータトロン関数はだいたい等しい: $\sigma_x = \sigma_y = \sqrt{\frac{\beta_x \varepsilon_n}{\gamma \beta}}$

この場合、イオンによる tune shift:

$$\left(\Delta v_{x,y}\right)_{\text{ion}} \Box \frac{r_e I_0}{4\pi \beta^2 c e \varepsilon_n} \langle \eta \rangle L$$

 β = 1, r_e = 2.818×10⁻¹⁵ m, e = 1.6×10⁻¹⁹ C, β c = 3×10⁸ m/s を用いれば: $(\Delta v_{x,y})_{\text{ion}} \Box 4.67 \times 10^{-6} \times \frac{I_0[A] \cdot \langle \eta \rangle \cdot L[m]}{\varepsilon_n[m \cdot \text{rad}]}$

$$(\Delta V_{x,y})_{\text{ion}} \Box 4.67 \times 10^{-6} \times \frac{I_0[A] \cdot \langle \eta \rangle \cdot L[m]}{\mathcal{E}_n[m \cdot \text{rad}]}$$

(例) $I_0 = 0.1 \text{ A}, \epsilon_n = 10^{-6} \text{ mrad では}, \qquad \left(\Delta V_{x,y}\right)_{\text{ion}} \Box 0.46 \times \langle \eta \rangle \times L[m]$

実証機(L ~ 100 m): $(\Delta \nu_{x,y})_{ion} \Box 46 \times \langle \eta \rangle$

実用機(L~1000m):
$$\left(\Delta
u_{x,y}
ight)_{
m ion}$$
 \Box $460 imes ig\langle \eta ig
angle$

仮に Δv < 0.1を要求するならば、 実証機: <η> ~ 2×10⁻³ 以下, 実用機: <η> ~ 2×10⁻⁴ 以下が必要である。

ベータトロン位相エラーへの制限は、絶対値(Δv or $\Delta \phi$)か相対値($\Delta v/v$) のどちらで考えるべきか?

Hoffstaetterの論文では、相対値で10%以下のベータトロン位相エラーを 要求している。その時、100mAでは中性化率 $\theta < 1.4 \times 10^{-3}$ を要求。 $v \sim 10$ 程度であれば、上記の値と大体合っている。

まとめ

- バンチ繰り返し1.3 GHzの運転では、critical mass による イオン捕獲の禁止は期待出来ず、イオンが捕獲される可能 性が大きい。
- 捕獲されたイオンの横方向サイズがビームサイズと同程度 であるとすれば、ERLでは超低エミッタンスのため、イオン の空間電荷によるチューンシフトが大きくなり得る。
- チューンシフトだけからでも、neutralization factor η は1より充分に小さくする必要がありそうである。
- 今後の検討事項:
 - イオンと電子ビームの相互作用による不安定性が起こり得るか?
 - イオン捕獲への有効な対策は?
 - 真空度は重要か?